

## 「力作ぞろいの論文」

藤井宏志

今年度の地理学研究室では、大学院修士論文7編、学部卒業論文9編、合計16編がまとまった。いずれも力作ぞろいである。本当によくやったと思う。よくやったという言葉添えるには理由がある。それは本学が、他大学とは違う条件にあるからである。一般に大学は前期・後期の2学期制であるが、本学は3学期制をとっており、夏期休業期間が短く、第三学期は3月中旬まで授業がある。また、学部は1年から4年まで9種の充実した教育実習があり、授業科目も多く、4年になっても1週間の時間割表に空時間はほとんどなく、調査のための時間をとるのは困難を極める。加えて、4年の春から夏にかけては教員採用試験の準備もある。

大学院は、2年間のうち第一学年目は、一般の大学院とは違い授業科目が多く、本格的な調査・研究は第二学年目になってからである。こうした条件下での論文作成であるから、著者及び指導教官の御努力を多としたいのである。

論文をテーマにより大別すれば、修士論文は、地形発達史（杉浦）、風成塵のESR分析と古風系（鈴木宏）と自然地理学系が2編、水利調整と流域管理（北）、観光地理（泥谷）、地場産業研究（藤田）、島嶼国地誌（本間）、経済地理（森井）と人文地理学系が5編、卒業論文は、風成塵の粒度組成と古風系（前田）、プラントオパール分析と古環境（千代反田、田中、内田、吉田）と自然地理学系が5編、観光地理（鈴木聡）、都市計画（鈴木健祐、高橋）、地域変化（道端）と人文地理学系が4編である。

自然地理学系は、地球環境問題の解決に貢献する古環境の解明に関する研究が多く、人文地理学系は国内外に生じている農村・都市や産業の問題を解明する地域研究が多く、いずれも現代的な課題に挑戦している。

研究にまず必要なのは「どうなっているの？、どうして？」という疑問や好奇心をもつことである。こうした疑問や好奇心が、困難で根気のいる調査や分析作業を支えてくれる。今年度の諸論文では、それぞれ自然環境や地域についての疑問・好奇心を持続させ、見事にそれらを解明・実証し、自分の満足だけでなく広く社会に貢献する論文を完成させているのには感心させられる。

地理学研究の特徴は、なんといっても現場主義にあるといえよう。地図、文献、空中写真、統計資料などを見て研究するのも重要であるが、自分の足で地域を歩き、自然や景観を見、風に吹かれ土に触れ、土地の人の話を聞くことも大切である。今回の諸論文はすべて現場主義をとり、地域に根をおろしている。国内ではそれぞれ、兵庫県市川流域（北）、南四国（泥谷）、兵庫県と全国産地（藤田）、兵庫県北西部（鈴木聡）、兵庫県西播磨（鈴木健祐）、兵庫県三田市（高橋）、大阪府泉南（道端）、青森県下北半島（千代反田）、北海道苫前（田中）、島根県出雲海岸（内田）、鳥取県鳥取砂丘（吉田）がフィールドである。外国をフィールドにする場合、どんな国でも健康と安全に十分な注意を払う必要があるが、見事に調査をやり遂げている。フィールドはそれぞれ、パラオ共和国（本間）、フィリピン共和国ネグロス島（森井）、トルコ共和国アナトリア高原（杉浦）、沖縄県・台湾・ニュージーラ

ンド（鈴木宏），大韓民国（前田）である。

これら修士論文，卒業論文の原本は，本学図書館及び教育・言語・社会棟7階の地図資料室に備えてあるので大いに御活用いただきたい。

末筆ながら，論文作成にあたって，御指導，御協力いただいた方々にあつく御礼申し上げます。また「研究報告」3号の編集を担当された皆様に御礼申し上げます。